

令和3年産の米生産が始まります。今年度の重点技術対策に留意し、時期に応じた管理作業を確実に実践して、「消費者から選ばれ続ける米」に仕上げましょう！

令和3年度重点技術対策

参照ページ:p14

- ①出穂期の高温回避
- ②斑点米カメムシ類の適正な防除
- ③適正な水管理による根づくりの徹底
- ④登熟期間の水管理の徹底
- ⑤早生品種の倒伏防止対策の徹底

表1 土づくり資材の施用量の目安

資材名	標準施用量 (kg/10a)
粒状ケイカル	200
元気	100
シリカロマン	100
シンキョーライトP	100

1 春の土づくり

参照ページ:p28~35

(1) 土づくり資材の施用

管内の多くの圃場ではケイ酸分が不足しています。前年秋に施用しなかった圃場は、**土づくり資材を必ず春に散布**してください(表1)。

(2) 有機物の施用

腐植や加里が不足している圃場では、**発酵鶏ふんを75~100kg/10a施用**しましょう。なおこの場合、基肥窒素量を1~2kg/10a減肥してください。

(3) 深耕による作土深の確保

トラクタの速度を落とし、ロータリーの回転数を遅くして、**作土深15cm以上を確保**しましょう。特に秋耕できなかった圃場では、ゆっくり丁寧に作業を行いましょう。

「土づくり」は「稲づくり」の基本です！



春の農作業安全運動展開中
↳ 転倒・転落事故に注意しましょう！



R3重点技術対策②

2 春のカメムシ被害低減対策

参照ページ:p30、48、49

(1) ケイ酸質資材の施用

籾殻のケイ酸濃度の上昇は、割籾の発生を防ぎ、カメムシによる斑点米発生を軽減します。土づくり資材を散布して、ケイ酸分を補給しましょう(表1)。

(2) 畦畔等のイネ科雑草の除草

初期のカメムシ類の発生密度を低下でき、以後の発生量も抑えられます(図1)。ふ化幼虫の餌を無くすため、スズメノカタビラやスズメノテッポウを中心に、畦畔等の除草を行ってください(表2)。

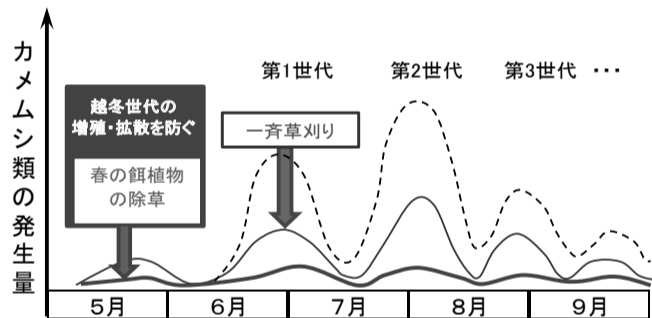


図1 カメムシ類の発生消長(模式図)

表2 春の畦畔等の除草管理とカメムシ類の発生密度低減効果

除草対策		越冬世代に対する密度低減効果		期待される主な効果
方法	処理ポイント等	幼虫	成虫	
除草剤散布	4月下旬頃までに、バスタ液剤、ザクサ液剤等の茎葉処理剤を散布する	○	○	①幼虫は餌となるイネ科雑草が無く生存できない ②成虫の飛来や産卵がみられない
草刈り	穂が出ないように刈り取る	△	○	①幼虫の発育遅延や羽化率の低下 ②成虫の飛来や産卵の抑制

注)○:効果が高い、△:一定の効果がある

お願い・お知らせ

◎「生産記録簿兼GAPチェックシート」

の記入・提出は必須事項です！

参照ページ:p56、57

JAでは記録内容に基づき、出荷・トレーサビリティに対応するとともに、次年度栽培基準の見直しに活用しております。安全安心な農作物の継続供給のために、**生産記録簿兼GAPチェックシートは確実に記載し、必ず提出する**ようお願いいたします。

確認シートの活用で、自らの管理作業の改善事項も明確にできます！



◎「電子メールによる営農情報の提供」を行っています。

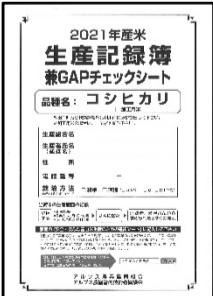
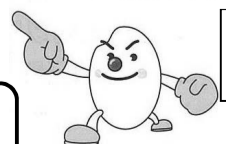
<http://ja-alps.com>



- ・スマートフォンやパソコン等で簡単に登録でき、ご希望の情報を選択できます。
- ・右記のアドレスやQRコードから登録画面に進めます。
- ・詳細は「広報アルプス3月号」4ページをご覧ください。

※JAアルプスHPでは、各種営農情報、農業情報ボックス(動画)等、役立つ農の情報をお届けしています。こちらもご活用ください。

見てね！



3 コシヒカリの育苗計画 参照ページ：p36～39

コシヒカリの田植えは、**5月15日を中心、育苗日数は20日間以内**を目安に、計画的な育苗を行いましょ(表3)。

また育苗期間は高温になりやすいので、**ハウス内の換気を徹底し、理想の苗に仕上げましょ(図2)**。

表3 育苗計画の目安

田植予定日	浸種日	催芽日	播種日	育苗日数	出穂期
5/10	4/8頃	4/18頃	4/19頃	21日間	8/1頃
5/15	4/16頃	4/24頃	4/25頃	20日間	8/4頃
5/20	4/24頃	5/1頃	5/2頃	18日間	8/7頃

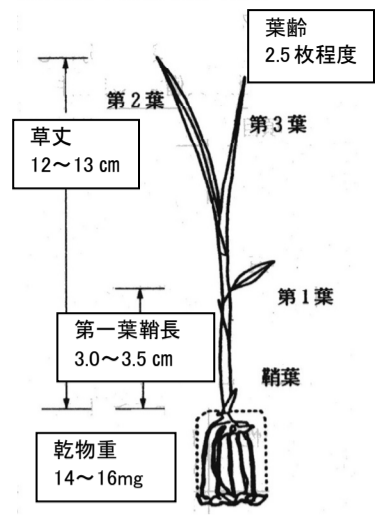


図2 目標とする苗(120g播)

<育苗作業スケジュール：5月15日田植えの場合>

月日(目安)	作業	温度	作業ポイント
事前準備	ハウス準備	ハウス毎に1つ 温度計を準備	・かん水装置を点検し散布ムラを調整 ・ハウスまわりに排水溝を設置
	機材消毒		・育苗資材等はイチバン(500倍液、瞬時浸漬)で消毒
4/15 <small>田植日に合わせてスタート!</small>	比重選 ↓水洗い ネット詰め		・比重液を作る際は、硫安はよく溶かす(表4) ・比重選後の種籾は、十分に水洗いする ・種籾は種子ネットの7割程度を目安に、余裕をもって詰める
	種子消毒	水温 10~15°C 桶ごとに温度計を設置	・モミガードC水和剤200倍液で24時間浸漬 ・薬液は種籾の2倍量を準備(表5) ・2~3回上下に攪拌し、種子を完全に浸漬
↓消毒済種子を使用する場合は「浸種」から開始↓			
4/16	浸種	水温 10~15°C 特に浸種初日は 12.5°Cを確保	・浸種期間の目安は、積算気温(水温×日数)120°C ・種子消毒の効果を高めるため、浸種開始後3日は水の交換をしない ・浸種4日目以降は、酸素供給のため2日に1回は水を交換 ・種子籾の胚乳がアメ色で透明になったら、浸種完了
4/24	催芽	育苗器内温度 30°C	・催芽のバラツキを小さくするため、催芽中は1日に2~3回袋を反転 ・催芽の程度はハトムネ程度(写真1)
4/25	播種	写真2 播種量の目安 (5cm四方に70粒)	・種籾はしっかりと水を切る ・播種量は乾籾120(水切り籾150)g/箱(写真2) ・苗箱施薬剤(参照ページ:p50)を播種同時施薬する場合、規定量が確実に入るよう調整 ・覆土は苗箱上面よりやや少な目(0.5cm確保)とする(図3)
	出芽		育苗器内温度 30°C
4/28	搬出・緑化	ハウス内温度 昼：25°C以下 夜：10°C以上 温度計は 苗箱の横、苗の高さに設置	・芽の長さが1cm程度に揃ったら搬出 ・搬出後、覆土を落ち着かせるため、必ずかん水する ・苗の白化を防ぐため、搬出直後は被覆資材で遮光 ・緑化したら被覆資材を速やかに除去
4/30	硬化		・水分不足による葉ヤケ防止のため、床土の乾きに応じてかん水実施 ・こまめに温度計をチェックし、気温の高い日中は十分に換気する ・天気予報が晴れなら、常時換気する ※晴天の場合、外気温が低くてもハウス内温度は上昇します! ・強風時でも温度が高い時は、風下のすそを開ける ・田植10日前頃からは、昼夜ともにハウスのすそを開け、外気に慣らす
5/15	田植え		大雪により育苗ハウスが損壊し、ワリフ育苗等を実施する場合は、各営農経済センターや農林振興センターにご相談ください。

表4 比重液の作り方(うるち、水10Lの場合)

比重	硫安
1.13	2.5kg

表5 薬液の作り方(200倍液)

種籾	水	薬剤
10kg	20L	100g

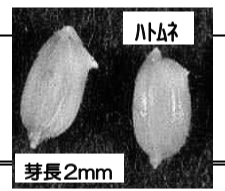


写真1 催芽の目安

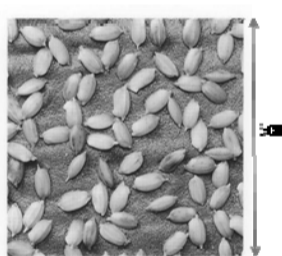


写真2 播種量の目安(5cm四方に70粒)

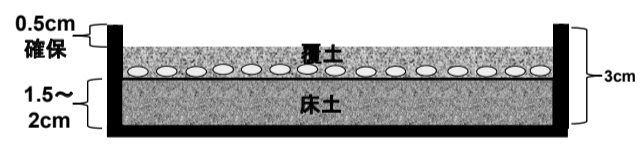


図3 播種イメージ

田植えに向け、計画的に圃場準備(①畦塗り、②耕起作業、③代かき作業)を行いましょ。 参考ページ:p40